

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「兵庫県とファミリーマートが弁当の共同開発を決定」
- 2) 「シャープ、太陽光発電システムに 15 年有償保証制度」
- 3) 「国産米がなくなる?!」
- 4) 「海岸のゴミを作品に、神戸の学生ら浜辺で回収」

1) 「兵庫県とファミリーマートが弁当の共同開発を決定」

兵庫県とファミリーマートは、「連携と協力に関する協定」の締結 2 周年を記念して、兵庫県産食材を使用した弁当を共同で開発すると発表した。本年の 8 月下旬には期間限定で、関西地方（兵庫県、滋賀県、京都府、大阪府、奈良県、和歌山県）のファミリーマート店舗約 1 万 6000 店で発売予定だ。

なお、この弁当開発の様子は、サンテレビの毎週日曜日（第 3 日曜日を除く）に放送する、兵庫県広報テレビ番組「県民情報番組 ひょうご “ワイワイ”」の「ワイワイコンビニのチャレンジ！コンビニ弁当」コーナーで紹介していく。

【取り組み内容】

- ・概要：兵庫県広報専門員が、兵庫県認証食品をはじめとする県内各地の美味で魅力的な食材を使用し、兵庫の食や食文化の豊かさを詰め込んだ 2 種類の「兵庫らしい弁当」を開発。

- ・発売期間：8 月下旬から約 3 週間（予定）

- ・販売地域及び店舗数：関西地方のファミリーマート店舗 約 1,600 店

兵庫県においては、“但馬の味どり”や“バジルペースト”などの県産食材を商品開発に取り入れることはもちろんのこと、美方郡香美町の老舗蔵元や神戸・南京町の人気中華料理店などとコラボした商品を発売しております。

ファミリーマートは、お客さまひとり一人と強く、深くつながり、「気軽にこころの豊かさ」を感じていただけるコンビニを目指して「ファミリーマートらしさ」を追求してまいります。

“地産地消”という言葉が一般的になり、特別感より身近なイメージが強くなっていると感じる今、それをどのようにアピールするかで売り上げや消費者の反応は大きく変わってきそうだ。単に地産地消を販売するのでは無く、今回のように製作過程から順を追って発信していくことで他との差別化や、購入意欲も変わるのではないか。

地産地消というキーワードには、様々な付加価値を付けることでまだまだアピールする力が眠っていると感じた。

2) 「シャープ、太陽光発電システムに 15 年有償保証制度」

シャープは住宅用太陽光発電システム全体を 15 年間保証する有償サービス「まるごと 15 年保証」を 7 月 1 日に始めると発表した。期間中に本体システムやリモコンをはじめとする

周辺機器が故障した場合、回数の制限なしで修理や交換が無料となり、発電出力の低下分を回復するサービスも受けられる。

15年間におよび長期の保証は業界初という。料金は発電容量3-4キロワット未満の場合、15年分で1万5960円。7月から始まる太陽光など再生可能エネルギーの固定価格買い取り制度の導入を前に、新サービスで他社との差別化を図り、顧客の囲い込みを目指す。

現状では無償で10年保証しているが、電力を変換するパワーコンディショナーは10年目以降に故障する頻度が高まるため、機器に不安を持つ消費者向けに導入を促す。システムを購入する顧客は無償の10年保証か、有償の15年保証のいずれかを選べるが、シャープは新規分の全量で15年保証の契約を目指す。既存の10年保証も、10月1日から1年間限定で15年保証への切り替え期間を設け、半分程度の移行を狙う。

パナソニックや京セラ、外資系メーカーなどは保証を10年間としているケースが大半だが、稲田周次ソーラーシステム事業部長は「15年保証で設備機器に対する不安を解消したい」としている。

シャープが注力している太陽光発電事業だが、故障や能力低下が考えられる時期からの無償サービスは心強い。こういった省エネ設備は、イニシャルコスト(初期投資)をいかにしてランニングコスト(維持費)で相殺しメリットを出せるかが重要な部分。そこに向けて今後は住宅だけでなく、商業施設での導入にも様々なアフターサービスが出るのかもしれない。

3) 「国産米がなくなる?!」

外食産業界で米不足が懸念されている。現在、大手外食チェーンをはじめ、中小の飲食店が安心して安全な日本の米の確保に力を注いでいる。今まで当たり前だった日本の米が外国産の米に変わると、特にどんぶり物などを取り扱うチェーンにとっては、食感や味、風味などが微妙に変わる可能性もあり、国産米の確保は死活問題ともなっている。日本の米自給率は今までほぼ100%で、食材の多くが外国産であっても、米はほとんどが国産であった。過去に1993年の凶作時で75%まで落ち込んだ時期があるが、農林水産省も平成23年産の米の予想収穫量を813万4000tとしており、福島の出荷制限米を除いても米の生産量は800万トン以上あり、数字上は例年と変わらず、米が不足するような事態とはならない。関係者によると、2011年産は原発事故の影響で福島県産の米の一部が出荷制限(国の基準値で放射性セシウムが1キロあたり100ベクレル以上)となった。出荷制限米が数万トンあるものの、100ベクレル以下の米はすでに生産者の手から離れ、米業者が買い付けをほぼ完了している状況という。

では、一体何故、不足しているのか?

まず、1つは米農家が今まで以上に備蓄分を増やしていること。「米農家は自分たちが食べる備蓄米に加え、今まで以上に親族や知人、友人から『米を売ってくれないか』と言われていくことで、生産量は例年並みであっても、市場に出す米の量をぐっと減らしている」と指摘。更に、食の欧米化、人口の高齢化なども追い打ちをかけている。

次に前述の福島の米が、生産者の手から離れても、すべてが市場に出回っていないということがある。福島県産は年間の生産量が35万tあり、全国の約5%を担っている。出荷制限

米を除いても、買い付けされた米は30万t位あると言われている。だが、国の基準では安全とは言っても、売る側も買う側も慎重になっているため、なかなか市場に出てこないという見方が有力だろう。

国産米が不足すれば、今後、国産米を利用した商品は値上げとなり、外国産米を値下げするという事態も起こりうる。しかし、米不足に際して皮肉にも日本政府は減反政策を行っており、主食用作付面積は平成22年産と比べ全国計で約5万1000haの減少となる152万6000haとなっている。現状、米不足を改善できる余地は少なく、政府の政策が裏目に出るような形になってしまったのである。

飽食のご時世で、身の回りに食べ物が溢れている生活に慣れきってしまっているため、自分に関係する話だとはなかなか認識しがたい。しかしこれは現実には起こっている問題であり、自分たちの生活にもっとも身近な米がこのような危機にあることを把握して、今まで当たり前のように食べていた国産米も有難いものとして食べなければならないと思った。

4) 「海岸のゴミを作品に、神戸の学生ら浜辺で回収」

来年開催される「瀬戸内国際芸術祭2013」で、香川県坂出市沙弥島を舞台に作品を展開する神戸芸術工科大学の学生らが7日、同島を訪れ、漂着物の発泡スチロールを制作の材料とするために回収した。島内を巡って景色や雰囲気も味わい、作品のイメージを膨らませた。訪れたのは学生4人と教授ら3人。芸術祭をサポートする「こえび隊」メンバーや地域住民らも参加した。

同大は芸術祭の春の期間（3月20日-4月21日）に参加。作品をプロデュースするデザイン学部の戸矢崎満男教授によると、讃岐三白にちなんで「白」をテーマにした作品を展示する予定にしている。具体的な構想はこれから練り上げるが、発泡スチロールは材料の一つとして活用する。

参加者は、砂浜などに打ち上げられた大小さまざまな発泡スチロールを回収。このほか、廃校となった沙弥島小・中学校の校舎内を見学したり、海岸線の遊歩道を歩いて眺めや地形などを確かめ、市の担当者から島の歴史や文化についての説明も受けた。

大学院1年の真辺孝亮さん（23）は「のどかで風や波の音、鳥の鳴き声がすごく心地よかった。感じたことを作品に生かし、地域の活性化に役立てばうれしい」と意気込んでいた。

“アート”はどんな物でも材料になり得ると思うが、ゴミを材料にすれば拾い集めることで環境保全にもつながり一石二鳥だ。また、ゴミに目を向けることでどれだけの量のゴミが発生していて、どんな物が流れ着いているのか気付くことができるだろうから、作品を作るだけに留まらない発見も多くありそうだ。どんなものについても見方を変えてみることは大切だと改めて思った。